

令和7年度第1回浅口市総合教育会議議事録

1. 招集日時 令和7年7月15日（火）
2. 場 所 中央公民館 1階 第3会議室
3. 開 会 午前11時00分
4. 閉 会 午前11時55分
5. 出席者 市長 栗山康彦 教育長 文谷元信
教育委員 高戸 崇 教育委員 藤澤弘幸
教育委員 河野由美子 教育委員 坂本正恵
6. 説明のために出席した者の氏名
教育次長 難波勝敏 教育総務課長 大島永太郎
学校教育課長 加藤靖雄 学校教育課主幹 平本友美
教育総務課 平井恵美子（事務局）

7. 議事の概要

教育次長 令和7年度第1回浅口市総合教育会議の開会を宣する。

次第2 市長挨拶について

市 長 第1回目の総合教育会議に大変暑い中お集まりいただきありがとうございます。我々執行部側と教育部局が一所懸命に話し合いをして意思を統一し、情報共有していこうということで開かれている会議である。本日の議題は、GIGAスクール構想第2期についてである。昨日の新聞に、全国学力テストの結果も載っていた。我々の時代とは教育の内容も大きく変わっており、パソコンなど試行錯誤の状態ではないかと思う。様々な課題があると思う。忌憚のない意見をお聞かせいただきたい。

教育次長 次第3 協議題について

浅口市総合教育会議運営要綱第3条の規定により、市長に議事進行を求める。

市 長 浅口市総合教育会議運営要綱に基づき、議事進行を行う。

協議題 GIGAスクール構想第2期について

事務局に説明を求める。

加藤課長 資料により説明。

先ほど市長からあったように学力調査の結果の公表があったが、市の結果はまだ届いていない。県学力調査の状況は、7月末に公表される予定になっているので、本日の資料は昨年度の数字を使用している。県学力状況調査の対象は小学3、4、5年生、中学1、2年生である。全国平均と比較して本市の児童生徒の状況を説明する。全国平均より多少下の教科もあるが概ね全国平均を上

回っている。令和7年度も引き続きこういう状況であったらと思う。この結果の一番大きい原因と思われるのは、学校長によるアクションプラン方向性を教職員が共通理解し、各学校で力を入れて授業改善している。二つ目は、指導教諭による授業公開の実施をしている。そして、1人1台端末の活用、どこの場所でも広げて、主体的で対話的な深い学びとしての端末の活用をしている。活用の場の一つは協働的な学び、友達と一緒に学ぼうという使い方である。もう一つは個別最適な学び、自分のペースで学ぶということが大事である。そして家庭の学習にも繋げていく。加えて、ネットモラルについても合わせて学ぶ必要があり、各学校で行っている。

- 市長 ただいまの説明に対して何か質問意見等あるか。
- 坂本委員 徐々に学力が上がってきていると読み取れ、良い傾向であると思う。学校訪問に行くが、ICT機器を使用しながら様々な授業が特に小学校で行われており、それが現れているのではと思う。学校によって地域性というものもあり、学力がちょっと低いのが問題だという学校もあった。その学校は先生方が検討しながらICTを使う使わないは別として、様々な努力をされている。先生方の努力が、結果に繋がっているのではないか。
- 河野委員 学校訪問を行っているが、どの学校も先生方がすごく努力を熱心にしており、豊かな心を育むことと共に、学力向上にも力を入れている。その成果として平均的にいいスコアが出てきていると理解している。きっと今度公表される内容は、この度の内容以上のスコアではないかと期待している。小学校6年生は学年として国語の力が高い学年ではないかと思うが、算数についてほんの少し残念だった部分がこの1年間の成果として、中学校1年のテストで学力が定着していればよいと思っている。やはりどの子にも学力の定着を目指していきたいと思う。
- 藤澤委員 テストも違うだろうと思うが、このテストに向けての対策を学校はしているのか。
- 加藤課長 学校によるが、テスト対策としてはしていないが、テストに向けて練習はするのではないかと思う。
- 藤澤委員 何か対策をした方がいいのではないかと思う。
他の市町村の結果を確認できるか。
- 加藤課長 昨年度のことは把握はしていないが、以前は市の情報を全部公表いたが、やめる傾向になってきている。
- 高戸委員 テストの結果がこういう結果であって、大事なのはそれに向けてのプロセスであるが、学校へ行って個別で学ぶのであれば、学校行く必要がないのではと思う。要は新型コロナ感染症のときに自

家でパソコンさえあれば勉強ができるということで、タブレットが有効に活用された。1人1台ある1番のメリットは、家庭学習にある。家に帰って宿題等でタブレットをしっかりと活用するというのが一番大事なのではないか。学校へ行って協働的な学びにタブレットを活用することも大事かもしれないが、学校へ行って個別でやるのであれば学校ではなくて家でもできるのでないかと思う。私達は重たい教科書やドリルを持って帰って家で宿題をしていたが、このタブレットで宿題ができる。それも膨大な量できるということであれば、そういう家庭学習にもっと活用するべきだと思う。そうすれば結果的にも良くなってくるのではないか。

教育長 岡山県全体でも、同じようにアクションプランがあり、端末を活用しており同じ土俵の上である。学力に差が出てくるのは、子どもたちの集団の雰囲気というのもあるが、やはり一番は学校の先生方の共通理解、そして意識、本当に活用させて学力を向上させてやろうという思い。日々の授業・宿題も計画的に出して、学びを深めさせることが必要である。そういった意味ではおそらく去年一昨年で危機感を持ってくださった各学校が、しっかりと学校の中で体制を作り、先生がリーダーシップ持ち、アクションプランの達成に向けてしっかりと徹底してやっている成果が少なくとも去年は出て、良かったと思う。本年度以降もしっかりと徹底していく、そういった気持ちが必要かと思う。

市長 調査の結果、本当に向上しているのかは分からないが、今日の新聞にも記述式が苦手と点数がかなり低いとあった。社会に出ると、自分で考えて書かないといけない。それが極端にぐっと低いというのは、パソコンのせいもあるのではないかと思う。低いところは上げていかないといけない。そういう対策はどうなっているか。

加藤課長 本市の結果として、記述式と選択式についての得点の割合は、すぐにお答えできないが、今回の令和7年度の結果についてはしっかりと検討していこうと思う。書くことについては、打つこととは別に必ずやっている。そこについて全部ICTに切り替わっているということはない。ただ作文など以前私達が指導していた時は、間違いがあったら先生が答え合わせをして直すということをしてきたが、今増えているのは、タブレットで文章打って、それを直して、最終を手で書くというような指導をすることが増えてきているので学び方も少し変わってきている。

市長 記述式が点数が低いと新聞に書いてあったが、これからの時代に、記述式の点数が低くてもいいのか。記述式が大切なのかということがどう進んでいくのか、社会に出るための元を今作ってるわけだから、将来的に子どもたちが社会に出て実際に書くことが必要

ならししっかりと教育もしていけないといけないのではと思った。自分たちで考えて手で書く。パソコンとはもちろん違う。その辺りはどうか。

加藤課長 学校が評価する観点が三つあり、学びに向かう態度、知識技能、思考・判断・表現、表現するということは絶対に無くならない。必要がある知識能力として、どの教科でも培うようになっているので、書くことに注力しないということはない。手で書くこととタブレットで入力することはだんだん同じように扱われているところはある。漢字を書くこととは別に、文章を表現するというのであれば、手で書くだけではなく、入力していくというのは常時行われている。

市長 続けて次の部分の説明を求める。

加藤課長 1人1台端末の活用で大きく分けると、二つの学びがある。一つは、協働的な学び、友達と関わり合いながら情報共有や共同作業をする。もう一つは個別最適な学び、1人で自分のペースで学ぶ。浅口の子どもたちがタブレット端末を毎日使っている割合は、令和5年度の小学校は53%、令和6年度は若干増え54%、中学校は24%から39%に増えている。令和6年度12月の調べでは数値がそれぞれ小学校は約70%、中学校は約50%に上がっていたので令和7年度にはもっと増えるのではと目標を立てている。小学校中学校共に、授業への活用は増えてきている。中学校はまだまだというところもある。最近の小学4年生の授業では、今まで紙で行っていたアンケートなどの集計を、タブレット端末で行い、それが授業時間内に瞬時に回答として返ってくる。結果についてグループの中で話し合いの場を設けるといった学び方ができている。

藤澤委員 時間を効率的にできるのは良いのではないか。

高戸委員 話し合いの時にタブレットを一つにしてみんなで見ると、結果の集計などに使うのにはいいと思う。

河野委員 以前なら、手書きのアンケート結果を自分たちでまとめて集計して、となるところを瞬時にグラフ化したものが資料として扱えるというところは本当にすごい利点があり、その先の話し合い学習にすぐ生かすことができる。話し合い学習を重点的に学習できる。良いところを生かしていけば、効率的な授業になり、子どもたちも必要などころの力が伸びると思う。

坂本委員 能率的でとても素晴らしいと思う。それに集中して一つのことができるのでとても良かったと思う。

教育長 このような学びをした子どもたちが中学生、高校生、社会人となる。子どもたちは本当にこの1人1台端末を使って様々な学びを

している。今は一つの集計結果に対して意見を言い合うことになったが、個別で作ったものをまた一つに合せていくこともできる。この1人1台端末を使って本当に学びが収縮したり拡散したりということを繰り返しながら、学びを高めていくことができる。非常に有効なツールである。社会に出て行ってもそういう活用しながら提案書を作ったりと仕事にも使っていく。学力という部分と、そういった活用によって成果を出していくことはそれぞれ尺度が違うが、思考・判断・表現の部分というのは非常にこのタブレットを使っていくのが有効である。

市長 瞬時に様々なデータでグラフや表を作成できるアプリ等も入っている端末だが、今年度更新の時期がきている。2台目を更新することになる。更新すると5年間使える。ICT機器は5年間の間にももの凄く進歩する。性能的に、大丈夫なのかという心配が非常にある。

加藤課長 端末のOSはバージョンアップしていくこともあるので、そういったことで対応していくことになる。

先ほど見ていただいた学習の仕方についての子どもたちの意見を紹介する。こういったICTを活用することによって、友達と考えを共有したり比べたりしやすくなること、また友達と協力しながら話を進めることができることは、9割ぐらいの子どもたちが肯定的に評価している。協働的な学びの手段としての活用が増えてきて、その良さを子どもたちが実感してきている。教える先生たちも、どんな場面でこれを使えばいいかという方法が分かってくる。

また、個別最適な学びとあるが、今端末で使用している学習アプリが今年度いっぱい使用期限が切れる。学習アプリは更新をしていきたいと考えている。算数の単元の終わりなどにプリント学習もするが、併せてこういった学習アプリでドリル学習をしている。ICTを活用するような学習に対して子どもたちがどう思っているかについて昨年度調査があった。タブレット端末を使い自分のペースで理解しながら学習を進めることができることに対して、とてもそう思うと答えた児童生徒の割合は、小学校29.1%、中学校19.5%であった。これは県・全国平均と比較すると、少し低い傾向であった。ICTを活用することについてはいいと思っているが、その効果の実感が少し弱い傾向にある。今後は、1人1人に応じた活用の促進、使うことが目的であってはいけないが、その効果を感じられるものであるのだったら、効果が感じられるようにしていきたい。端末の更新に合わせて最適なものを検討していきたい。小学校1・2年生は国語算数二教科、小学校3年生

以上は4教科ないし5教科となる。学習アプリは価格や性能に違いがあり、より良いものを検討しているところである。先ほど教育長が申し上げたとおりタブレット端末の活用によって学力向上だけでなく、今後子どもたちのICTリテラシー能力を高め、よりよい使い方ができる環境を整えていきたい。

坂本委員 学校を訪問し、子どもたちの様子を見ると、かつての教育とは様変わりしており、ペーパーだけに頼らずICT等利用した教育がなされている。使い方が問題で、基本は人が人を作るわけで、人を一番に考えて、機器にに使われるのではなく機器を使うことができるようにしていかなければいけない。そうはいってもやはり子どもたちの教育のために、より良いものを使って学力の向上に繋がったり、いろんな人間的な向上に繋がってほしいのではと思っています。

河野委員 先ほど話題に出たドリル学習アプリを活用する時間は算数の授業で毎回ではないと思う。活用できる時間は先ほど例としてでた、学習単元の一番最後に自分の苦手なところを補充するであるとか、反対にもっと発展的な学習をするであるとか目的に応じた使い方、又は家庭学習において効果がある。学校でドリル学習の時間が、週の中で時間割として設定をされているのかを伺いたい。そういった時間にドリル学習アプリに特化して、効果的に使用できるのではと思う。

加藤課長 帯の学習、朝学習については取り組んでいる学校はある。学習内容については学校によるが、そこは学校それぞれが判断している。

藤澤委員 タブレット学習には時間短縮の効果があると思う。子どもたちがこれからの長い期間これによって、上手な時間の使い方ができるようになっていけばよい。

高戸委員 子どもがドリル学習アプリを使ってるのを見たが、やはり使い方だと感じた。例えば、漢字を書いていた子どもは、一画少ない字を書いていたが、AIのおかげで、この漢字ですかと候補が上がってきたので子どもは自分が書きたかった字を選び、結果ドリルは正解となった。隣で鉛筆で書いた子は1画少なかったらこれは不正解となる。やはり書くということも大事なことであって、ドリルはドリルでやっていく、これはこれで時間短縮であったり様々な面でより高度なものとして、ICTを使ったりタブレット端末を使いより高みに持っていくことも大事だが、基本となる部分はやはり今も昔も変わらないと思うのでそういったものをしっかりと融合させてやっていただきたい。そうすればより良いものになっていき、学力ももっともって向上するのではないかと思う。そのために、学習アプリを選ぶのは非常に大事なことでしょ

かりと検討していただきたい。

教育長 やはり基礎基本があって上に積んでいかなければならない。漢字の話もあったが、書き順であるとか、画数といったものをしっかりと身につけながら、ICTを活用していく。そういうことが大切である。パソコンの使いすぎというか、漢字が出ない。略字しか書けなくなっている。そういうような風潮の中でやはり何が大切かというところは外してはいけない。浅口市の先生方にもICTの活用だけでなく、何が基礎基本なのかというあたりを常に確認しながら、しっかりと段階を踏まえて、活用に繋げていっていただきたい。

市長 最適なアプリについては先ほど言ったが、私は予算の方を担当しているので、やはり今を学ぶ子どもたちのためには、まだ試行錯誤の段階だが、よいと思うアプリは入れていただきたい。予算はつける。浅口市は教育に予算を惜しんだことはない。常に最適最先端のものを取り入れている。検討の段階から相談をしっかりと欲しい。

心配なのが、教える側の能力、先生でもタブレットを使い、完全に使いこなせる方と使いこなせない方がいる。年齢にもよるが、そういったところの小中学校の学校自体の連携はどうなっているのか。先生同士の連携がどうなっているのかを心配する。勉強会がされてるのかどうか、例えば自分のペースで勉強することができるか、学習を進めることができるというようなことを書いているが、このタブレット教育で取り残されてる子どもがいるかもしれない。そういった良いことと悪いこと、要は悪いことを洗い出してそれを何とかしていかなければならないというところをもう少し議論すべきじゃないかと感じている。教育長や高戸委員も言われたが、ごくごく本当に基本的な漢字を、書き順や漢字自体を忘れる。パソコンでは、そういうことが起きている。今の子どもたちは漢字学習では最初からパソコンのワードが主となる。先ほど記述式の話も出たが、記述式になったときに、この漢字が書けるのかという心配がある。そういったことも今後注視していかなければいけない。

その他について、事務局から何かあるか。

教育次長 特になし。

市長 令和7年度第1回浅口市総合教育会議の閉会を宣する。